

ハンナ・アーレントの政治に関する著作は、近年益々大きな注目を集めている。しかし、よく指摘されるように、アーレントの政治概念は、一つの重大な問題をはらんでいた。それは、とりわけ『人間の条件』などの著作において、行為者のアイデンティティーを暴露する「活動」が強調され、政治の本質的な要素として特権視されているという事実であった。これに比べた場合、アーレントの後の著作で、「代表的な思考」や「判断」が政治の一要素として真剣に論じられるようになったことは、大きな進歩である。しかし、この議論でさえ、思慮深い読者の目には、問題をはらんでいた。それは、このような思考や判断が、独善に陥り、自己正当化のディスコースへと転落するのではないかという懸念であった。

本報告では、この問題について検討するため、アーレントの著作の中でも、初期の1940年代から1950年代初頭の作品に注目する。これらの作品は、アーレントが亡命の地のニューヨークで、一般知識人向けの雑誌に執筆したエッセイを含み、その一部は『パリアとしてのユダヤ人』などの論文集に収められている。これらの作品の中に、アーレントの比較的后期の概念に属する代表的な思考や判断を、より具体的に把握する——もっといえ、自己正当化的ではない思考と判断の形態について考える——ための手がかりがひそんでいるのではないかというのが、本報告での中心的な論点である。

このように、本報告で強調したいのは、ユダヤ人問題についてのアーレントの初期の作品に、代表的な思考を単なる自己正当化のディスコースから隔てるためのヒントが示されているのではないかという点である。アーレントの議論を紐解くと、このような思考（と判断）には、三つの特徴があるといえる。第一に、それは限りなく繊細で自己反省的である。それは、自らの行為が起こしうる帰結を様々な角度から考慮し、何事をも自明視しない態度に根ざしている。第二に、それは中立的である。それはどのような当事者に対しても、同様に繊細な思考と判断を要求する。第三に、この実践は、非常に稀な出来事である。それは、日常的というよりは、例外的な出来事であり、アーレントにおいて有名な「新しさ」の現象ともつながっている。

ユダヤ人問題についてのエッセイは、別の意味でも興味深い。周知のように、アーレントはアメリカ合衆国の建国を偉大な政治的行為として賛美し、とりわけ1980年代以降に思想界をにぎわすことになる先住民問題について、正面から扱うことはなかった。その点で、彼女の議論には深刻な欠落があったといつてよい。イスラエルの建国に対して向けられた厳しい眼差しは、アーレントにおける建国（創設）の概念そのものの再考を促すかもしれない。